日本比較文学会　第 50 回記念東京大会

2012 年 10 月 20 日（土）
於：日本大学文理学部

森鷗外の転換とラーゲルレーヴ受容
—「牧師」、スウェーデン語原典、およびドイツ語訳の比較—

中丸　禎子（東京理科大学）

発表内容

１．研究の背景
２．翻訳者 森鷗外
　（１）鷗外の北欧文学翻訳
　（２）鷗外のラーゲルレーヴ受容
　　① ラーゲルレーヴと代表作『イェスタ・ベルリングのサガ』
　　② 鷗外の関心
３．鷗外の転換
　（１）年表
　（２）現代小説
４．日本語・スウェーデン語・ドイツ語比較
　（１）鷗外訳とラングフェルトのドイツ語訳の比較
　（２）スウェーデン語原文と比較した際のラングフェルト訳の特徴

１．研究の背景

・　ラーゲルレーヴ研究➡日本における受容
・　最初期の受容者としての小山内薫と森鷗外➡新劇運動（北欧演劇の受容）
　※小山内薫「彼得の母」（1905）、「墓畔」（1908）
　※森鷗外「牧師」（1908）　☛【参考資料１】

・　「牧師」（『イェスタ・ベルリングのサガ』第１章）のみ：
　鷗外のキャリア・北欧文学受容史の中で小さい業績
　↕
　鷗外の転換期に訳された＋歴史小説・史伝との共通点

２．翻訳者 森鷗外

◀ ベルリン・森鷗外記念館のプレート
ドイツ文学紹介者としての鷗外に焦点を当てた紹介

1887-1888
森 鷗外
（1862-1922）
が居住

日本近代文学の創始者
作家
批評家

『ファウスト』、
レッシング、クライスト、
E. T. A. ホフマンの作品の
日本で最初の翻訳者

▲ 記念館外観

▲ 記念館入口

（画像：ベルリンにて中丸撮影、2007 年 12 月）

（１）鷗外の北欧文学翻訳

・新劇運動：新劇（西洋風の演劇）⇔旧劇（歌舞伎）
　　新派劇（自由民権思想の宣伝）

・劇団とのかかわり：自由劇場（二代目市川左団次・小山内薫）、近代劇協会（上山草人、鷗外が顧問）

・北欧文学の翻訳

イプセン（Henrik Ibisen, 1828-1906）
ストリンドベルイ（August Strindberg, 1849-1912）
ビョルンソン（Bjørnstjerne Bjørnson, 1832-1910）

当時最先端のヨーロッパ演劇＝北欧演劇
↓
依頼を受けて翻訳

・戯曲以外の翻訳：アンデルセン（Hans Christian Andersen, 1805-75）『即興詩人』
ラーゲルレーヴ「牧師」
ウィード（Gustav Wied, 1858-1914）「ねんねえ旅籠」「午後十一時」「薔薇」
ステエンホフ（Frida Stéenhoff, 1865-1945）「夜の二場」

（２）鷗外のラーゲルレーヴ受容

① ラーゲルレーヴと『イェスタ・ベルリングのサガ』

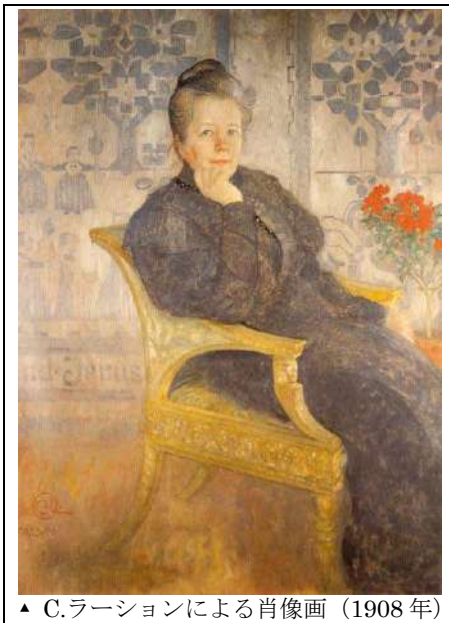
セルマ・ラーゲルレーヴ（Selma Lagerlöf, 1858-1940）

スウェーデンの女性作家、ヴェルムランド（ノルウェーとの国境）出身
1891：『イェスタ・ベルリングのサガ』→北欧「90 年代文学」の代表作
1901:『エルサレム 第 1 部』（Jerusalem I）→第 1 回ノーベル文学賞候補
1902：『エルサレム 第 2 部』（Jerusalem II）→英訳・独訳など同時出版
1906/1907：『ニルスのふしぎな旅』→80 か国語以上に翻訳
1907 年：ウップサラ大学名誉博士号授与（女性初）
1909 年：ノーベル文学賞受賞（女性初・スウェーデン人初）
1911 年：国際女性参政権会議（ストックホルム）で演説「家庭と国家」
　　→女性参政権の導入を主張
1914 年：スウェーデン・アカデミー会員に選出（女性初）
1933 年：「土間で書いた話」→ナチス批判、ドイツで発禁処分

北欧 90 年代文学（nittiotalet）

80 年代文学（自然主義文学／ストリンドベルイ、イプセン、ビョルンソン）への批判から出発

- デカダンス、個人主義、人間の精神
- 目に見えないもの（心理、魂、美、神秘、宗教、過去、自然）への関心
- 社会や人生に対する否定的な見方を批判
- ポジティヴな諦念（resignation）、人生肯定
- 生きる喜び
- ナショナリズム、民族主義の高揚
- ヘイデンスタム（S）、カールフェルト（S）、ハムスン（N）など（いずれもノーベル文学賞受賞）


▲ C.ラーションによる肖像画（1908 年）

▲20 クローナ紙幣（2014 年まで流通予定）

（画像（上）：ヴェルムランドのラーゲルレーヴ記念館で購入した絵葉書　（下）中丸がスウェーデンで両替）

『イェスタ・ベルリングのサガ』（*Gösta Berlings saga*, 1891）

ラーゲルレーヴのデビュー作。90 年代文学の代表作

- 全 38 章（導入部 2 章、本編 36 章）
- 鷗外訳「牧師」は、導入部第 1 章の翻訳
- 舞台は 1820 年代のヴェルムランド
- 牧師イェスタが飲酒によって説教を欠席。一度は免職を免れるが、悪友の悪戯により免職。ヴェルムランド一の権力を持つ少佐夫人に拾われ、エケビューの館で 12 人の「騎士」の一員として暮らす
- イェスタは、最後に、結婚してエケビューを去り、大工となる
- 各章はほぼ独立し、ヴェルムランドの人々のエピソードが描かれる
- ブランデスの紹介文 *Selma Lagerlöf. Gösta Berlings saga.* (1893)で、各国での人気が高まる
- ドイツで人気、三種類の翻訳➞郷土芸術運動における受容

M.Langfeldt (1896), M. Mann (1899), P. Klaiber-Gottschau(1903)

※郷土芸術運動：1890 年代～1910 年代にかけての民族主義的な文学運動。「血と大地文学」へと展開し、ナチズムの思想的根拠の一つを形成した。

▲マウリッツ・スティラー監督『イェスタ・ベルリングのサガ』(1924) でヒロインを演じるグレタ・ガルボ

（画像：http://www.doctormacro.com　2012 年 10 月 19 日閲覧）

② 鷗外の関心

・「牧師」を翻訳

・「椋鳥通信」（海外の新聞記事紹介）などでの紹介（主にノーベル賞受賞関連）☛**【参考資料 2】**

〔背景 1〕1908 年：ラーゲルレーヴ 50 歳

・国民作家としての地位の確立

・国を挙げての祝賀（記念切手の発行）

・ノーベル文学賞（1901 年開始）への期待

〔背景 2〕女性作家・女性解放運動への関心

・「現代思想」（1909）：オーストリアの作家リルケを。エレン・ケイの知己として紹介

※エレン・ケイは、スウェーデンの女性解放思想家。平塚らいてうに大きな影響を与えた。

※ケイは、ラーゲルレーヴ『ニルスのふしぎな旅』の成立にも関わった。

・「さへづり」（1911）：対話劇。ヨーロッパ（特に北欧）の女性参政権運動を紹介

・スウェーデンの雑誌『イドゥン』（*Idun*）

※ラーゲルレーヴが『イェスタ・ベルリングのサガ』の前身となる短編で賞を受賞し、デビューした雑誌

・エリン・ヴェグナー（Elin Wägner, 1882-1949, S）『ペン軸』（*Pennskaftet*, 1910）

※1940 年、ラーゲルレーヴの死を受け、女性で二番目のスウェーデン・アカデミー会員に
ラーゲルレーヴと親交、伝記（*Selma Lagerlöf.* Stockholm (Albert Bonniers Förlag) 1942-43）執筆

〔背景 3〕自然主義批判＝90 年代文学

共通点

	森鷗外	ラーゲルレーヴ
生年	1862	1858
生地	津和野	ヴェルムランド（ノルウェーとの国境）
第1作発表（雑誌）	1889	1886
幼少期	1868　明治維新 1871　廃藩置県	1870年代 スウェーデンの近代化
文学的特徴	反自然主義 理想の重視 レジニャシオン（諦念）	北欧90年代文学の代表作家 80年代文学（自然主義）批判 Resignation（V.v.Heidenstamm）
近代化以前という題材	歴史小説・史伝	デビュー作『イェスタ・ベルリングのサガ』

３．鷗外の転換

（１）年表

時期		年	出来事・主要作品	北欧文学翻訳
高揚期１（闘争的啓蒙）	文芸評論・軍事衛生評論	1888	ドイツ留学から帰国	
			カルデロン「調高矣洋絃一曲（しらべはたかしぎたるらのひとふし）」翻訳（公にされた最初の文学作品）	
		1889	雑誌『東京医事新誌』編集主任（1月～11月）	
			雑誌『衛生新誌』創刊	
		1890	雑誌『医事新誌』創刊	
			雑誌『衛生療病誌』創刊（『衛生新誌』『医事新誌』を統合）	
			『舞姫』 ｝ドイツ三部作	
			『うたかたの記』 ｝ドイツ三部作	
			『文づかひ』 ｝ドイツ三部作	
沈滞期		1892	私生活の混乱①　赤松登志子と離婚	アンデルセン（D）『即興詩人』翻訳開始
		1894	日清戦争	
		1899	私生活の混乱②　小倉に「左遷」（～1902）	
		1901	「北清事件の一面の観察」→**ヨーロッパ批判**	アンデルセン『即興詩人』刊行
		1903		イプセン（N）「牧師」
		1904	日露戦争（脚気問題）→**西欧科学中心主義を反省**	
		1906	*島村抱月・坪内逍遥「文芸協会」設立	ストリンドベルヒ（S）「債鬼」
		1908		**ラアエルレエフ「牧師」**
高揚期２（豊熟の時代）文芸作品	①現代小説（思想小説）	1909	雑誌『スバル』創刊→「椋鳥通信」連載開始	
			「半日」「仮面」「睡魔」「金毘羅」	ヰイド（D）「ねんねえ旅籠」「午後十一時」
			「キタ・セクスアリス」（発禁）	
			*二代目市川左団次・小山内薫「自由劇場」設立	イブセン「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」（「自由劇場」旗揚げ公演）
		1910	「沈黙の塔」→大逆事件批判	
			『青年』（～1911年）	
		1911	*文芸協会「人形の家」（島村抱月訳）初演	ストリンドベルヒ「一人舞台」「パリアス」
			「さへづり」→S、Nの**女性参政権運動**を紹介	ビョルンソン（N）「人力以上」「手袋」
			「妄想」	ヰイド「薔薇」
				イプセン「幽霊」
		1912	「かのやうに」	
			*上山草人「近代劇協会」設立（顧問：坪内逍遥・森鷗外）	
	②歴史小説	1912	明治天皇崩御・野木希典殉死→「興津弥五右衛門の遺書」	
		1913	「安部一族」	ステエンホオフ「夜の二場」
			ギヨエテ『ファウスト』翻訳	
			*近代劇協会「ノラ」初演	イブセン「ノラ」
		1914	「大塩平八郎」	ストリンドベルヒ「稲妻」
				ヰイド「尼」
				マアデウング（D）「父の讎（あだ）」
		1915	「魚玄機」「ぢいさんばあさん」「山椒大夫」「最後の一句」	
		1916	「寒山拾得」「高瀬舟」	
	③史伝	1916	「渋江抽斎」執筆開始	
		1917	「伊澤蘭軒」	
		1920	「北條霞亭」	ストリンドベルイ「ペリカン」
		1921	「北條霞亭の末一年」	

*＝新劇運動関連の出来事

略号：D＝デンマーク、N＝ノルウェー、S＝スウェーデン

（２）現代小説

①　西洋近代批判＝イプセン批判

「かのやうに」：☛**【引用１】**(a) (b)

義務が事実として証拠立てられるものでないと云ふこと丈分かつて、怪物扱ひ、幽霊扱ひにするイブセンの芝居なんぞを見る度に、僕は憤懣に堪へない。

神が事実でない。義務が事実でない。これはどうしても今日になつて認めずにはゐられないが、それを認めたのを手柄にして、神を涜す。義務を蹂躙する。そこに危険は始て生じる。

「青年」：☛構造としてのイプセン批判

- 主人公小泉純一、イプセン『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』（「自由劇場」の第１回公演、翻訳は鷗外）を見に有楽座に行き、法律学者の未亡人坂井夫人と知り合う。
- 長島要一の解釈：観客席の純一と坂井夫人←対応→舞台上のエアハルトとウィルトン夫人
- 純一と坂井夫人の別れ←対照的→エアハルトとウィルトン夫人の駆け落ち

②　与えられた役割を演じてきた自己への反省

「妄想」：☛**【引用２】**(b)(d)

その勤めてゐる役の背後に、別に何物かが存在してゐなくてはならないやうに感ぜられる。

勉強する子供から、勉強する学校生徒、勉強する官吏、勉強する留学生といふのが、皆その役である。赤く黒く塗られてゐる顔をいつか洗つて、一寸舞台から降りて、静かに自分といふものを考へて見たい、背後の何物かの面目を覗いて見たいと思ひ思ひしながら、舞台監督の鞭を背中に受けて、役から役を勤め続けてゐる。此役が即ち生だとは考へられない。背後にある或る物が真の生ではあるまいかと思はれる。

③　過去・故郷へのまなざし

「妄想」：☛**【引用２】**(e)

此頃折々切実に感ずる故郷の恋しさなんぞも、浮草が波に揺られて遠い処へ行つて浮いてゐるのに、どうかするとその揺れるのが根に響くやうな感じであるが、これは舞台でしてゐる役の感じではない。

「青年」：☛**【引用３】**(a)(b)

国の亡くなつたお祖母あさんが話して聞せた伝説

こん度は現代語で、現代人の微細な観察を書いて、そして古い伝説の味を傷けないようにして見せよう

➞古くからの道徳と、近代的理性の融合：歴史小説・史伝・『イェスタ・ベルリングのサガ』

４．テクスト比較

「牧師」のあらすじ

- 主人公の牧師イェスタ・ベルリングが、酒によって説教を欠席
- 数週間の欠席の後、審問に来た主教らの前で説教をする
- その日が最後と思った牧師は、信仰を取り戻し、すばらしい説教をする
- インスピレーションの男
- 一般信者・主教らが説教に感動し、牧師は免職を免れる
- 飲み仲間のクリスチャン・ベルクが、牧師が仲間から外れることを怖れ、主教を脅す
- 神にからかわれたと思った牧師は、牧師館を去る

（1）鷗外訳とラングフェルトのドイツ語訳

①　日本の読者に分かりやすい補足

特徴	ドイツ語原文	ドイツ語の日本語直訳	鷗外訳
キリスト教用語 →仏教用語に	die Kirche	教会	寺
	die Gemeinde	会衆	組合の人々
言葉を補う	unter den Bauern im Mittelschiffe	中廊（中舟）の農民たちの中にも	中舟といふ広い所に集つてゐる百姓どもの中にも
	Der Prediger war jung, hochgewachsen, schlank und blendend schön.	牧師は若く、背が高く成長し、細く、輝くように美しい	牧師は、年が若くて體がすらりとして、顔は眩いほど美くしい。
二文を一文に	Es war Gösta Berling's erstes Unglück, es blieb nicht das letzte.	それはゲスタ・ベルリングの最初の不幸だったが、最後のもののままではなかった。	ギヨスタア、ベルリングが為めには、この禍は最初の禍であつた。併しそれは最後のでは無かつた。

②　道を踏み外す主人公への肯定的評価☛【引用４】

特徴	ドイツ語原文	ドイツ語の日本語直訳	鷗外訳
主人公の意志	該当箇所なし	該当箇所なし	信ずる
	Er wußte, daß er abgesetzt werden würde. Gott wollte es so.	彼は知っている、彼は免職されるだろうと。神がそのように望むのだ。	彼は免職になるのは明らかであつて、それは神の所為であると信ずる。
	wollte	（助動詞）～するつもりだった	決心した
主人公の肯定	die sich weder Sporen noch die Peitsche gefallen lassen wollen.	拍車も鞭も甘受するがままになるのを望まない	鞭をも拍車をも恐れぬ **≪比較≫**【引用２】(a)(b)
複数→単数 主人公の喩えとして分かりやすく	für die Füllen (...) ist das Leben schwer	仔馬たちにとって、人生は難しい	駒の、世を渡るはむつかしいもので、

③　導入部第一部のみの翻訳

・主人公の更生を訳さない

➞鷗外の主人公たちが生きなかった自由な人生（転落に終わる）

（2）ラングフェルトのドイツ語訳の特徴

・　ドイツで最初の『イェスタ・ベルリングのサガ』訳
・　作者に無許可で刊行（ラーゲルレーヴが与えたマティルデ・マンの翻訳権を無視）
・　筋の変更、表現の削除など

特徴	ドイツ語原文	ドイツ語の日本語直訳	スウェーデン語の直訳
改行箇所の変更	Es war Gösta Berling's erstes Unglück, es blieb nicht das letzte. Denn für	これはイェスタ・ベルリングの最初の不幸だったが、最後のではなかった。	これは、イェスタ・ベルリングに降りかかった最初の不幸でした。しかし最

	die Füllen, die sich weder Sporen noch die Peitsche gefallen lassen wollen, ist das Leben schwer.	というのは、拍車も鞭も振り下ろされることを望まない仔馬たちにとって、人生は難しいからだ。	後のではありませんでした。拍車や鞭に耐えられない仔馬たちには、人生は難しく感じます。
説明的	die sich weder Sporen noch die Peitsche gefallen lassen wollen.	拍車も鞭も甘受するがままになるのを望まない	拍車や鞭に耐えられない
訳文の不統一	Prediger, Pastor	-	牧師(prästen)
普遍性の欠如	der zwantiger jahre unseres Jahrhunderts	我らの世紀の 20 年代	1820 年代

➞鷗外による改善（？）

【発表者連絡先】
メールアドレス：nakamart@rs.tus.ac.jp
ホームページ：http://www7b.biglobe.ne.jp/~nakamaru_teiko/index.html
（「業績」欄から、これまでに発表した雑誌掲載論文（PDF ファイル）がダウンロードできます）

【参考文献】

〈一次文献〉
- 森鷗外「森鷗外全集」、岩波書店、1972 年
  〈引用作品〉
  「牧師」、第 4 巻 83～96 ページ
  「青年」、第 6 巻 274～471 ページ
  「妄想」、第 8 巻 195～217 ページ
  「かのやうに」、第 10 巻 43～78 ページ
- Lagerlöf, Selma：Gösta Berligns saga. Albert Bonniers Förlag, 1981
- Lagerlöf, Selma: Gösta Berling. Eine Sammlung Erzählungen aus dem alten Wermland. (übrs.v.) Margarethe Langfeldt. Leipzig (H. Haessel Verlag) 1905（東京大学総合図書館・鷗外文庫所蔵）

〈二次文献〉
- 池内健次『森鷗外と近代日本』ミネルヴァ書房、2001 年
- 鷗外研究会『森鷗外　『スバル』の時代』双文社出版、1997 年
- 金子幸代『鷗外と〈女性〉―森鷗外論究―』大東出版社、1992 年
- 金子幸代編・解説『鷗外　女性論集』、不二出版、2006 年
- 長島要一『森鷗外　文化の翻訳者』岩波新書、2005 年
- 平塚らいてう「鷗外夫妻と青鞜」、「文芸」1962 年（昭和 37 年）8 月号、174～175 ページ
- 山室静『評伝　森鷗外』講談社文芸文庫、1999 年

≪引用≫

【引用 1】

道徳だつてさうだ。(a)義務が事実として証拠立てられるものでないと云ふこと丈分かつて、怪物扱ひ、幽霊扱ひにするイブセンの芝居なんぞを見る度に、僕は憤懣に堪へない。破壊は免るべからざる破壊かも知れない。しかしその跡には果してなんにもないのか。手に取られない、微かなやうな外観のものではあるが、底にはかのやうにが儼乎として存立してゐる。人間は飽くまでも義務があるかのやうに行はなくてはならない。僕はさう行つて行く積りだ。[中略](b)神が事実でない。義務が事実でない。これはどうしても今日になつて認めずにはゐられないが、それを認めたのを手柄にして、神を涜す。義務を蹂躙する。そこに危険は始て生じる。行為は勿論、思想まで、さう云ふ危険な事は十分撲滅しようとするが好い。併しそんな奴の出て来たのを見て、天国を信ずる昔に戻さう、地球が動かずにゐて、太陽が巡回してゐると思ふ昔に戻さうとしたつて、それは不可能だ。さうするには大学も何も潰してしまつて、世間をくら闇にしなくてはならない。黔首を愚にしなくてはならない。それは不可能だ。どうしても、かのやうにを尊敬する、僕の立場より外に、立場はない。(「かのやうに」、第十巻、75-76)

【引用２】

生れてから今日まで、自分は何をしてゐるか。(a)終始何物かに策うたれ駆られてゐるやうに学問といふことに齷齪してゐる。これは自分に或る働きが出来るやうに、自分を為上げるのだと思つてゐる。其目的は幾分か達せられるかも知れない。併し自分のしてゐる事は、役者が舞台へ出て或る役を勤めてゐるに過ぎないやうに感ぜられる。(b)その勤めてゐる役の背後に、別に何物かが存在してゐなくてはならないやうに感ぜられる。(c)策うたれ駆られてばかりゐる為めに、その何物かが醒覚する暇がないやうに感ぜられる。(d)勉強する子供から、勉強する学校生徒、勉強する官吏、勉強する留学生といふのが、皆その役である。赤く黒く塗られてゐる顔をいつか洗つて、一寸舞台から降りて、静かに自分といふものを考へて見たい、背後の何物かの面目を覗いて見たいと思ひ思ひしながら、舞台監督の鞭を背中に受けて、役から役を勤め続けてゐる。此役が即ち生だとは考へられない。背後にある或る物が真の生ではあるまいかと思はれる。併しその或る物は目を醒まさう醒まさうと思ひながら、又してはうとうとして眠つてしまふ。(e)此頃折々切実に感ずる故郷の恋しさなんぞも、浮草が波に揺られて遠い処へ行つて浮いてゐるのに、どうかするとその揺れるのが根に響くやうな感じであるが、これは舞台でしてゐる役の感じではない。併しそんな感じは、一寸頭を挙げるかと思ふと、直ぐに引つ込んでしまふ。(「妄想」、第 8 巻、200-201)

【引用３】

純一が書かうと思つてゐる物は、現今の流行とは少し方角を異にしてゐる。なぜと云ふに、その sujet は(a)国の亡くなつたお祖母あさんが話して聞せた伝説であるからである。この伝説を書かうと云ふことは、これまでにも度々企てた。形式も種々に考へて、韻文にしようとしたり、散文にしようとしたり、叙事的に Flaubert の三つの物語の中の或る物のやうな体裁を学ばうと思つたこともあり、Maeterlinck の短い脚本を藍本にしやうと思つたこともある。東京へ出る少し前にした、最後の試みは二三十枚書き掛けた儘で、谷中にある革包の底に這入つている。あれはその頃知らず識らずの間に、所謂自然派小説の影響を受けてゐる最中であつたので、初めに狙つて書き出した Archaïsme が、意味の上からも、詞の上からも途中で邪魔になつて来たのであつた。(b)こん度は現代語で、現代人の微細な観察を書いて、そして古い伝説の味を傷けないようにして見せようと、純一は工夫してゐるのである。(「青年」、第六巻、466)

【引用４－（１）】鷗外訳（日本語）

牧師の家には、牧師の影が見えなくなつた。彼は此所に止まつて弁護を試みようとは想はぬ。彼は神が己を愚弄したと(a-1)信ずる。神が己を助けぬと(a-2)信ずる。彼は免職になるのは明らかであつて、それは神の所為であると(a-3)信ずる。それ故止まるよりは寧ろ去るがよいと(a-4)決心したのである。

この事は千八百二十年代の初めの頃に、西ヱルムランドのある片田舎の教務区での出来事である。

ギヨスタア、ベルリングが為めには、この禍は最初の禍であつた。併しそれは最後のでは無かつた。何故といふに(b)鞭をも拍車をも恐れぬ駒の、世を渡るのはむつかしいもので、人が痛い目に逢はせる度に、彼は道の無い所を、底の知れない谷に向けて走るのである。若し道が石沢山で車が牽き悪い時は、彼はその車を顚覆させて逃げるより外の道を知らないのである。（「牧師」、第四巻、95-96）

【引用４－（２）】ラングフェルト訳（ドイツ語）

Als der Morgen kam, war der Pastor aus dem Pfarrhause verschwunden. Er wollte nicht bleiben, um sich zu verteidigen. Gott hatte sein Spiel mit ihm getrieben. Gott wollte ihm nicht helfen. Er wußte, daß er abgelegt werden würde. Gott wollte es so. Da wollte er lieber gleich gehen.

Dies geschah zu Anfang der zwantiger jahre unseres Jahrhunderts in einem entlegenen Kirchspiele im westlichen Wermland.

Es war Gösta Berling's erstes Unglück, es blieb nicht das letzte. Denn für die Füllen, die sich weder Sporen noch die Peitsche gefallen lassen wollen, ist das Leben schwer. Bei jedem Schmerze, der ihnen zugefügt wird, scheunen sie auf ungebahnten Wegen dem gähnenden Abgrunde zu. Sowie der Weg steinig und die Fahrt mühsam ist, wissen sie sich keinen anderen Rat als den Wagen umzuwerfen und wird dahinzueilen.

朝が来た時、牧師は牧師館から消えていた。彼は、自己弁護のために留まろうとは思わなかった。神は彼をもてあそんだのだ。神は彼を助けるつもりなどない。彼は知っている、自分が免職されるであろうことを。神がそう望むのだ。だから彼は、むしろすぐに行ってしまいたいと思う。

このことは、我々の世紀の 20 年代に、西ヴェルムランドのある辺鄙な教区で起こった。

これはイェスタ・ベルリングの最初の不幸だったが、最後のではなかった。というのは、拍車も鞭も振り下ろされることを望まない仔馬たちにとって、人生は難しいからだ。彼らに加えられるあらゆる痛みごとに、彼らはならされていない道を、ぽっかりと空いた深淵へと逃れていく。道が石だらけだったり、草稿が骨の折れるものだったりすると、彼らは馬車をひっくり返してそちらへ歩いていく以外の忠告を知らないのである。（*Der Prediger*, S.12）

【引用４－（３）】原文（スウェーデン語）

Då morgonen kom, var prästen borta från prästgården. Han hade inte brytt sig om att stanna och försvara sig. Gud hade drivit gäck med honom. Gud ville inte hjälpa honom. Han visste, att han skulle bli avsatt. Gud ville det så. Han kunde så gärna gå med ens.

Detta hände i början av adertonhundratjugotalet i en avlägsen socken i västra Värmland.

Det var den första olycka, som övergick Gösta Berling; det blev inte den sista.

Ty sådana fålar finna livet svart, som inte tåla sporre eller piska. Vid varje smärta, som övergår dem, skena de åstad på vilda vägar mot gapande avgrunder. Så snart vägen är stenig och färden bekymmersam, veta de ingen annan råd än att välta lasset och fara åstad i galenskap.

朝が来た時、牧師は牧師館から去っていました。彼は、留まって弁解することに心を砕こうとは思いませんでした。神さまがおれを愚弄した。神さまはおれを助けないだろう。彼には、自分が免職されるであろうことは分かっていました。神様がそう望むのです。彼はだから一時に去ることが好んでできたのでした。

このことは、1820 年代の初めに、西ヴェルムランドの僻地の一教区で起こりました。

これは、イェスタ・ベルリングに降りかかった最初の不幸でした。しかし最後のではありませんでした。

拍車や鞭に耐えられない仔馬たちには、人生は難しく感じます。痛みを与えられるたびごとに、彼らは舗装されていない道を、口を開けた深淵に向かって、騎手に従わずやみくもに走っていきます。道が石だらけだったり、道行が不安に満ちたものであったりすると、彼らは積み荷を放り出し、狂気の中へと離れ走っていくよりほかの忠告を知らないのです。

【参考資料１】ラーゲルレーヴの邦訳（邦訳の刊行年順、抜粋）

邦訳	訳者	邦訳タイトル（所収、体裁）	原題の直訳　（　）内は所収単行本タイトル
1905	小山内薫（一時期、無教会に接近）	彼得の母	我らが主と聖ペテロ（キリスト伝説集）
1908	小山内薫	墓畔	墓地（イェスタ・ベルリングのサガ）
1908	森鷗外	牧師	牧師（イェスタ・ベルリングのサガ）
1914	神近市子（〈青鞜〉）	私生児の母	沼の家の娘
1916	香川鉄蔵（無教会）	むねあかどり	（キリスト伝説集）
1918	香川鉄蔵	飛行一寸法師	ニルス・ホルガションのふしぎなスウェーデンの旅（以下同）
1919	小林哥津子（〈青鞜〉）	不思議のたび	ニルスのふしぎな旅
1921	野上彌生子（〈青鞜〉）	ゲスタ・ベルリング	イェスタ・ベルリングのサガ
1928	生田春月（キリスト教）	沼の家の娘	（あるサガの物語）
1928	生田春月	地主の家の物語	地主屋敷の物語
1934	香川鉄蔵（一時期、無教会に接近）	不思議な旅	ニルスのふしぎな旅
1938	Ishiga Osamu（無教会）	Betulehemu no Osanago	（キリスト伝説集）
1941	丸山武夫	ゲスタ・ベルリングの伝説	イェスタ・ベルリングのサガ
1941	西田正一	幻の馬車	御者
1941	西田正一	開かれた扉	（秋）
1942	石賀修	エルサレム１	エルサレム１
1945	イシガオサム	キリスト伝説集	キリスト伝説集
1949	石丸静雄	沼の家の娘	（あるサガの物語）
1949	山室静（〈近代文学〉）	幻の馬車	御者
1951	佐々木基一（〈近代文学〉）	地主の家の物語	地主屋敷の物語
1952	イシガオサム	エルサレム２	エルサレム２
1953	山室静	ニルスのふしぎなたび	ニルスのふしぎな旅
1958	山室静	つるばらの間で	（見えざるきずな）
1961	山室静	沼の家の娘	（あるサガの物語）
1962	今西祐行（キリスト教）	ふしぎな童話集	ニルスのふしぎな旅
1963	山室静	小鳥の巣の伝説	（見えざるきずな）
1965	山室静	軽気球	（あるサガの物語）
1979	中村妙子（キリスト教）	クリスマスローズの伝説	（見えざるきずな）
1980	鳥海永行　※アニメ監督	ニルスのふしぎなたび	ニルスのふしぎな旅
1981	香川鉄蔵	軽気球	（あるサガの物語）
1981	イシガオサム	ポルトガリヤの皇帝さん	ポルチュガリエの皇帝
1982	イシガオサム	短編集	（トロルと人間）
1982	イシガオサム	短編集	（見えざるきずな）
1982	香川鉄蔵・節	ニルスのふしぎな旅	ニルスのふしぎな旅
1984	イシガオサム	短編集	（見えざるきずな）
1994	イシガオサム	イングマルソン一族	イングマルソンたち（エルサレム）
1996	小塩節（キリスト教）	聖夜	聖夜（キリスト伝説集）
2007	菱木晃子	ニルスのふしぎな旅	ニルスのふしぎな旅

・　上原進『ラーゲルレーヴ原作の邦訳書リスト』（2008）をもとに中丸が作成

博士論文では、このデータをもとに、新劇運動、女性解放運動、キリスト教（主に無教会）、雑誌『近代文学』同人による、北欧文学とラーゲルレーヴの受容を考察した。

【参考資料２】鷗外のラーゲルレーヴ紹介

※／は改行、（　）はいずれも『鷗外全集　第二十七巻』ページ数と、記事発行年

『椋鳥通信』

○Nobel 賞金が瑞典の女作者／Selma Lagerloef／に授けられた。同時に賞金を受けたのは、化学で Ostwald-Leipzig, 医学で Kocher-Bern, 理学で Marconi 及 Braun-Strassburg である。（108／1909.12.13）

○瑞典王は今回 Nobel 賞金を受けた／Selma Lagerloef／に Pro literis et arbitus 賞牌を授与して、同時に此賞牌を Seraphim 勲章の綬で帯びることを許した。此勲章は皇族に限つて賜はる勲章である。（118／1910.01.06）

○ノベル賞金を得た／Selma Lagerloef／は Frykstale にある Marbacka 荘園を買ふさうだ。これは女詩人の両親のもつてゐた家である。Mellanfrykan の流に枕んで眺望がひどく好い。女詩人の父 Erik は女詩人の祖父の買つた此家で六人の子を設けた。其一人が Selma である。（149／1910.03.05）

○三月十二日伯林の Hochschule fuer Musik で／Selma Lagerloef／の崇拝者が演説会を開く。（171／1910.03.05）

○ストツクホルムで／Lotten von Kraemer／が死んで其遺産で、「九人のアカデミイ」と云ふものが創立せられた。男四人女四人の終身会員の上に男女の首座が輪番に据ゑられてゐて、新進作者に補助を与へると云ふ為組である。首座は Viktor Almquist で、女の会員には／Selma Lagerloef／と Ellen Key とが加はつてゐる。（778／1913.04.21）

○Falun (Dalarna) と Marbacka (Vaermland) との二箇所に／Selma Lagerloef／は家を持つてゐる。フアルンの家は古い鉱山の工場に近い。家の周囲には園がある。白樺が並んで立つてゐる。覆盆子が造つてある。マルバカの家は子供の時に住んだ家で、人手に渡つてゐたのを、ノベル賞金を貰つたお蔭で買ひ戻したのである。Gosta Berling の Liljecron が故郷と云ふのがこれだ。黒樺の大木がある。多く鳥獣が飼つてある。セルマが部屋は二階にある。八十五歳になる老母の部屋と相対してゐる。（786-787／1913.04.21）

『水のあなたより』

Selma Lagerloef.　四幕物 Das Maerchen vom Moorhof を上場する。（886／1914.06.15）

Selma Lagerloef.　スエエデンのアカデミイに入れられた。（905／1914.06.15）